



TITLE:

燭背・燈背ということ : 讀詞瑣記

AUTHOR(S):

村上, 哲見

---

CITATION:

村上, 哲見. 燭背・燈背ということ : 讀詞瑣記. 中國文學報 1954, 1: 86-92

ISSUE DATE:

1954-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/176574>

RIGHT:

燭背・燈背ということ — 讀詞瑣記 —

村上哲見

京都大學

詞すなわち詩餘は、元來酒席の興を添える歌曲であつたので、俗語的とおもわれるものをも含めて、詩文にはあまりみられない獨特の用語、表現が、頻繁にあらわれる。しかしその性質上、古人たちはこれに箋註を加えるというような作業を全くいつてよいほどしなかつたので、今となつてはそのような特有の用語、表現の多くは、意味内容を明らかに知ることができなくなつてしまつてゐる。「燭背」、「燈背」のごとき表現もその一つの例であつて、晚唐五代の詩餘にかなりしばしばみえるにもかかわらずその意味はさだかでない。以下はこのことばの解釋について一つの假定を提出するものである。

例えば晚唐の代表的な詩詞作者である溫庭筠に次のごとき更漏子一首がある。

柳絲長。春雨細。花外漏聲迢遞。驚塞雁。起城烏。畫屏金鷓鴣。香霧薄。透簾幕。惆悵謝家池閣。紅燭背。繡帷垂。夢長君不知。

（大意）春の宵、一人の女性が閨房の中に眠りもやらず情人をおもつてゐる。

柳のさえたはしだれて長く、春雨はしめやかに降る。花の外より傳わり來る漏刻の聲ははるかにものさびしく、邊陲へ赴かんとする雁の夢を破り、城につどう烏を目覺めしむるであろう。ただ臥戸の繪屏風の金の鷓鴣のみは雌雄睦まじくよりそうて、彼の女の佗びしさをいよいよ深くする。

すだれごしに望まれる夕もやのただよう庭園、この彼の女の豪壯な邸宅も、今はただ悲しみとのみ眼にうつる。ともしびをほのぐらくかげにしてぬいとりのとばりの垂れこめた臥戸にひとりねの夢のはてしなくさま

ように彼の人は知るや知らずや。

○驚塞雁、起城烏は唐突とみえないこともないが、  
「煙雁翻寒渚、霜鳥聚古城」・「城烏驚畫角、江雁避紅旗」（ともに白居易詩）のごとく唐詩にも類似の表現がしばしばみうけられ、成語のない方であろうとおもわれる。○謝家は謝娘とともに詩餘においてしばしば主題となる女性を指していることばであるが、一説に李德裕の愛妾謝秋娘であるといい、一説に王凝之の妻謝道韞であるという。いずれも疑いを存する。必ずしも語源にこだわる必要はない。○大意の中の傍線を施した部分が今問題にしているところであるが、これは以下の假定にもとづく解である。

この詞における「紅燭背」の句をとり出してみるならば、次の「繡帷垂」句と對句を形成し、したがって背は垂に對して動詞的なことばであろうことはまず間違いない。またここにみられるように「燭背」という場合、「帷」またはそれと類似のもの（帳、屏のごとき）と一緒にでてくるこ

とが多いのも注意すべきである。

この背という字は最も普通に用いられる意味としては「せなか」、「うしろがわ」のことであり、そこから動詞としては「せなかをむける」ということになり、「ソムク」、「ソムケル」と訓じられている。更に「暗誦する」という意味にもなるが、これはやや特殊な場合といえよう。従つて「燭背」といういい方はまず第一には「もしびがむこうむきになつている」という意味であるようにおもわれる。次には詩詞においては語序のきまりがゆるやかであるから「もしびをむこうむきにする」という意味にもなりうるであろう。さきの溫庭筠更漏子の句を中田勇次郎氏の譯注詞選では「紅蠟の燭をそむけぬ」と譯されている。このいずれの場合にしても、當時の燭台が一方だけを照らすようにできており、後者ではそのむきをかえるということになるのであろうが、當時用いられた燭台の構造を知る資料は今のたない。

この「燭背」、「燈背」のごときいい方は詩餘のみならず中晩唐の詩にもときどき見受けられ、それら詩詞における

例を通觀するならば「ソムク」、「ソムケル」という訓はあまり適切でないように思われる。試みに五代の詩餘の總集である花間集における例を列舉するならば次の如くである。

金鴨小屏山碧。故鄉春。烟靄隔。背蘭缸。溫庭筠 酒泉子

相憶夢難成。背窗燈半明。前人 菩薩蠻

紅燭背。繡帷垂。前人 更漏子

孤燈照壁背窗紗。韋莊 浣溪沙

燈背水窗高閣。前人 更漏子

清夜背燈嬌又醉。玉釵橫。山枕膩。寶帳鴛鴦春睡美。

牛嶠 應天長

畫堂深。紅焰小。背蘭缸。張泌 酒泉子

繡屏愁背一燈斜。前人 浣溪沙

銀釵背。銅漏永。阻佳期。顧夙 獻衷心

山枕上。燈背臉波橫。前人 甘州子

小窗深。孤燭背。淚縱橫。前人 浣溪沙

背帳風搖紅蠟滴。前人 前調

背帳又殘紅蠟燭。前人 玉樓春

銀燈背帳夢方酣。前人 酒泉子

蘭缸背帳月當樓。前人 荷葉盃

翠屏欹。銀燭背。鹿虔虔 思越人

紅燭半消殘焰短。依稀暗背銀屏。尹鶚 臨江仙

小窗燈影背。毛熙震 菩薩蠻

更に唐詩にその例を求めるならば、白居易・李商隱など、中・晚唐の詩にしばしば見受けられる。盛唐以前の詩にはこの種の用例は見當らないようであり、少くとも手近かに索引の存する杜甫と王維の詩には一度も用いられていない。唐詩における例を列舉するならば次のごとくである。

珠箔籠寒月。紗窗背曉燈。白居易 閨怨詞

斜背銀缸半下帷。前人 起嘗殘酌聽餘曲

絃清撥刺語錚錚。背却殘燈就月明。前人 琵琶

鐵檠移燈背。銀囊帶火懸。深藏曉蘭焰。閔貯宿香煙。

前人 青氈帳二十韻

背燭共憐深夜月。蹋花同惜少年春。前人 春中與盧四周

諒華陽觀同居詩

背壁燈殘經宿焰。前人 早夏曉興贈夢得

綠窗籠水影。紅壁背燈光。前人 遇蕭九微因話長安舊遊詩  
耿耿殘燈背壁影。蕭蕭暗雨打窗聲。前人 上陽白髮人  
風飜朱裏幕。雨冷通中秋。耿耿背斜燈。秋牀一人寢。  
前人 禁中秋宿

良夕背燈坐。方成合衣寢。元稹 合衣寢  
隙穿斜月照。燈背空牀黑。前人 帳舊蚊幃  
覺來正是平階雨。獨背寒燈枕手眠。李商隱 七月二十八  
日夜興王鄭二秀才聽雨後夢作

背燈獨共餘香語。前人 正月崇讓宅

花時隨酒遠。雨後背窗休。前人 燈

背牆燈影暗。溫庭筠 宿友人池

更有相思不相見。酒醒燈背月如鉤。李廷璧 愁詩

これらの用例を通觀するならば、「背」ということばが  
「ともしびが、とばり・びようぶ又はかべの背後にある状  
態」、或は「それらの背後に移す動作」を示すのではない  
かということが考えられる。そこでそのような假定を念頭  
におきつつ、ともしびととばり、びようぶなどの関連に  
おける他の表現を觀察してみる。

燭背・燈背ということ（村上）

五代詞における例

屏掩映燭熒煌。顧覓 甘州子

隔幃殘燭。猶照綺屏等。毛熙震 臨江仙

半垂羅幕。相映燭光明。孫光憲 前調

香燈半捲流蘇帳。韋莊 菩薩蠻

燈暗錦屏欹。月冷珠簾薄。魏承班 生查子

曉月墜。宿雲披。銀燭錦屏幃。馮延巳 鵲沖天

唐詩における例

翠屏遮燭影。紅袖下簾聲。白居易 人定

悄悄壁下床。紗籠耿殘燭。前人 北亭獨宿

燈火隔簾明。竹梢風雨聲。元稹 夜飲

隔箔山櫻熟。褰帷桂燭殘。李商隱 曉起

雲母屏風燭影深。長河漸落曉星沈。前人 常娥

六曲連環接翠帷。高樓半夜酒醒時。掩燈遮霧密如此。

雨落月明俱不知。前人 屏風

滿鴨香薰鸚鵡睡。隔簾燈照牡丹開。司空圖 樂府

誰家女兒臨夜妝。紅羅帳裏有燈光。李端 襄陽曲

これらの表現は、さきに挙げた「背」の用例と比べてそ

のうたわれている状態・雰圍氣において大きな距たりがあるとは思えない。とすれば「背」ということは、このような場合「遮」、「掩」、「隔」などに近い内容をもつてはなからうか。想像を一步進めるならば「遮」「掩」はむしろ「とばり」を主にした表現であり、「背」は同じ状態を「ともしび」を主にして表現したことはではないかと思われる。

次に散文における例として唐代の小説をとりあげてみる。

嵩乃返身閉戸。背燭危坐。楊巨源 紅線傳

至二更許。燈在牀之東南。忽爾稍暗。如此再三。章武

心知有變。因命移燭背牆。置室東西隅。旋聞室北角。

悉窣有聲。李景亮 李章武傳

前の例はなお明瞭でないが、後の例は明らかに「燭を牆の背後に移す」の意味であらうし、吉川幸次郎教授はこのところをまさしく「燈を壁の陰に移し」と譯しておられる。唐宋傳奇集

ここでのことばの意味内容の變革のあとを推理してみれば、この「移燭背牆」といういい方が最も原初的な

丁寧ないい方ではないかと思われる。中國の文語文では元來簡潔な表現が好まれ、詩詞ではそれが更に壓縮される傾向がある。従つて「鐵檠移燈背・・・深藏曉蘭焰」、「背帳又殘紅蠟燭」、「蘭釭背帳月當樓」、「耿耿殘燈背壁影」、「背牆燈影暗」のごとき例は散文における「移燭背牆」と同じ方向の内容をもつことが考えられ、このようないい方が更に熟されてくるならば、「牆」「帳」といつたことばが省かれて、遂には「燈背」或いは「背燈」というだけで同様な状態、動作を示すことができるであらう。

「背燈」ということばによつて表現される實際の状態を考えてみるならば、この表現は殆んど常に寢につくとき、もしくはすでに寢についているときについて用いられる。

ともしびをとばりのかげにおき、うすぼんやりしたあかりの中に寢につくという光景は中晩唐の爛熟した都會文化における生活にふさわしく、また詩餘のもつなめかしい雰圍氣に一致する。それは又ひとり寢の佗びしさをいやすものでもあり、實際の用例はこの場合の方が多いようである。はじめに掲げた溫庭筠更漏子の場合もその一例といえ

よう。そして中唐以後では少くとも詩を作るほどの文人たちの生活ではあかりをともしたまま寝るのが習慣であつたように、これまでに挙げた詩句からもそのことが考えられるが、次の如き例は一層明らかに示しているであろう。

曙燈殘又滅。風簾閉自翻。白居易 禁中曉臥懷王起居

星河耿耿漏繚繚。月闌燈微天欲曉。前人 睡覺

曙早燈猶在。涼初簾未收。前人 新秋夜雨

焰短寒缸盡。聲長曉漏起。前人 不睡

火銷燈盡天明後。前人 除夜

晨缸耿殘燈。宿閣凝微香。前人 新秋曉興

飲醉日將盡。醒時夜已闌。暗燈風焰曉。春席水飜寒。

元稹 酒醒

倦寢數殘更。孤燈暗又明。前人 雨後

燈暗酒醒顛倒枕。前人 宿石磯

ここではとりあえず元白の詩から例を拾ったが、他の詩人の作品にもこの種の表現は無数に存する。これが當時のごく普通の習慣であつたとするならば、「鐵檠移燈背」のようないい方は「良夕背燈坐」、「清夜背燈嬌又醉」における

燭背・燈背ということ（村上）

のごとく「背燈」の二字に壓縮することが可能であらうし、「背帳又殘紅蠟燭」、「耿耿殘燈背壁影」のごとき表現は「酒醒燈背月如鉤」、「銀缸背、銅漏永」、「燈背空牀黑」におけるごとく「燈背」の二字で表現することが可能であらう。そのように熟されてくるならば「背却。殘燈就月明」のごときいい方も現われてくる。また「珠箔籠寒月、紗窗背曉燈」、「綠窗籠水影、紅壁背燈光」などの對句の整正なることもかくて理解できる。

このことばについての從來の訓讀を参照してみると、佐久節氏は白樂天詩集（續國譯漢大文成）においてこの種の表現をすべて「ともしびにそむく」、「ともしびを背にする」と解しておられる。例をあげるならば次のごとくである。（原文は前出）

耿耿として斜燈に背き、秋牀一人寝ぬ。

斜に銀缸に背きて半ば帷を下す。

殘燈に背却して月明に就く。

鐵檠燈を移して背き、

珠箔寒月を籠め、紗窗曉燈に背く。（詩意に云う、曉に

は燈を背にして紗窓に對する。)

このように一律に「ソムク」と訓ずるのは非常な無理があるように思われる。例えば次の李商隱の詩の場合

初夢龍宮寶燄然。瑞霞明麗滿晴天。旋成醉倚蓬萊樹。

有箇仙人拍我肩。(中略)……恍惚無倪明又暗。低迷

不已斷還連。覺來正是平階雨。獨背寒燈枕手眠。七月

二十八日夜與王鄭二秀才聽雨後夢作

この末句を「獨り寒燈に背きて」と讀めば通じないことはないがまず平凡の句である。だがこの獨の字は朱鶴齡の注によれば「一作未」となっている。もし「未背」とした場合「いまだ寒燈にそむかず」では殆んど意味をなさない。當時ともしびをとばりのかげに移してほの暗くしてから眠る習慣があり、「背」ということばがその動作を意味すると假定すれば、「未背寒燈枕手眠」は「うたたねの夢であつたか」ということになり、この一首の詩は頗る安定を得る。

古くの詩にこのような表現が殆んどみられないのは、油などがなお貴重であつて人々の生活にこうした習慣がなく、

したがつてそのことがうたわれることもなかつたということが考えられる。なお充分に調べてはいないので斷言はできないが、宋以後に「背燈」に類する表現が殆んどみられないようであるのは如何なる故か今考え及ばない。

附、○元代雜劇の著作目錄である錄鬼簿に尙仲賢の作として越娘背燈劇なるものが存する由、吉川教授より教示があつたが、その本は傳つておらず、その意味も明らかでないことである。

○文中に例にあげた白居易の「耿耿殘燈背壁影」の句は和漢朗詠集に收められ「カウ／＼タルノコンノトモシビノカベニソムケタルカゲ」と訓じてある。(山田孝雄氏考訂本による)これだけでは訓者が如何に解していたかは明らかでない。

○本朝文粹卷一に「昔纏羅帷。雖慙骨肉之族。今背紗燈。俄昵胡越之人。」(朝綱 男女婚姻賦)とあり、我が國の漢文家にもこのことばは用いられている。